



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

2020年9月13日 年間第24主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：シラ書27章30節－28章7節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 14章7－9節

福音朗読：マタイによる福音書18章21－35節

今日のテーマ：憐れみ

三つの朗読から

第一朗読では「憤りと怒り」が復讐という罪の動機となります。しかし、自分と同じ「人間に憐れみをかけ」れば(4節)、自分の罪の赦しを願うのは可能となります。弱い者同士である人間が「憤りと怒り」を持ち続けたら、誰もその人の罪を赦すことはできないのです(4節参照)。ですから、「隣人に対して怒りを抱くな」(7節)と強く勧めています。

第二朗読には「生きる」ということばが何度も登場します。神に生きるようにと招かれているキリスト者には、同じく父なる神に生きた主イエス・キリストの生き方が模範となります。「わたしたちは主のもの」(8節)という表現は、わたしたちのいのちがキリストに属していることを教えてくれます。

福音朗読は無制限の赦しについてのたとえです。赦しを受けた人は、隣人への赦しを行うはずですが、このたとえに登場する家来には寛容がありません。「憐れに思って」(27節)、「憐れんでやる」(33節)が印象的な表現となります。深い同情を表すこのことばのおかげで赦しが成立し、関係が回復していきます。赦しとは関係の回復に他ならないのです。

説教

今日の福音の箇所に出会うといつも思い出すエピソードがあります。10年ほど前、前川神父さんが帰天しました。最期が近づいてきて、ベッド上で過ごすことが多くなった頃から「アメリカが憎い。浦上の街を原爆でメチャクチャにした。原爆のおかげで兄はとても苦しんだ、だからアメリカを赦せない」と何度も訴えていました。温厚で、やさしい方だった師の口から「憎い」「赦せない」ということばが繰り返され発せられるのに、驚かされました。帰天する数日前まで、師は繰り返しておられました。

前川師が帰天してからしばらくして、長崎を訪れた際に、同級生の冷水神父さんにこのことを話しました。「前川さん、最期まで原爆を落としたアメリカのことを赦せなかったんですよ。赦すって難しいなと思いました」。そうしたら、冷水師は「ちょっと、出かけないか」と小さな車にわたしを乗せてくれました。道すがら、冷水師は昔話を語ってくれたのです。

戦争が始まって、前川、冷水二人の小神学生はフランシスコ会の小神学校に寄宿していました。しかし、その建物を軍の接收から守るために、戦争の終わる年の春に結核診療所にしたのだそうです。小神学生たちは診療所の使用人として働いていました。原爆のあったその日、浦上からほど近いその診療所も爆風でかなり損害を被ったそうですが、その後たくさんの被災者たちが押しかけてきたそうです。その中には前川師のお兄さんもいました。背中一面に火傷を負っていたそうです。戦争が終結し、平和な時代がやってきても、被爆をした人々は社会の中で生きにくかったといいます。身体の苦しみと周囲の冷たい眼にさらされる苦しみで、多くの人々が哀しみに沈んでいったそうです。しばらくしてカナダ人のフランシスコ会の宣教師が二人、長崎を訪れてきました。それは、戦時中のあの診療所をそのまま続けるか、それとも元の小神学校に戻すかを決めるためでした。宣教師たちは苦しんでいる前川師のお兄さんのお家を訪問し、事情を聞かせてもらい、お兄さんのために祈り、二人して背中の中の傷口に手をおいて祝福したのだそうです。それ以来、お兄さんの傷はどんどんよくなっていきました。そして寝たきりの布団から起きだして、普通の生活へと戻ることができたのだそうです。

「着いたよ」と冷水師に促されて車を降りたのは、聖フランシスコ病院の裏手の駐車場でした。当時の結核診療所のあとに建てられた総合病院です。「見てごらん」と促されて見たのは大きな泰山木でした。それは爆心地から1.4キロメートルのところにもありながらも、幹に大きな裂け目のような傷をつけて原爆を生き残った樹でした。ちょうど時季だったので、大きな乳白色の可憐な花を咲かせていました。

冷水師と一緒にその樹を見上げて、七の七十倍赦しなさいといわれたイエスさまのことばを実行するのは難しいけれども、赦せないところを持ち続け、赦せないところに縛られて苦しんでいる人間の姿を、イエスさまはご存じなのだろうと思いました。赦せなくて、ささくれ立ったしまった人間のこころの中に、父である神さまはこのように美しい樹を植えてくださったのだと感じました。赦せないというこころの深い裂け目、深い傷の先に神さまは美しい花を咲かせてくださるのです。

すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り

今月は、ミサの中で「すべてのいのちを守るためのキリスト者の祈り」をご一緒に唱えています。簡単にこの祈りの解説を試みます。

宇宙万物の造り主である神よ、
あなたはお造りになったすべてのものご自分の優しさで包んでくださいます。

神はすべてのものの造り主です。風も水も空も大地も星々も、石も植物も虫も動物も、神によって造られました。自然はそれ自体が神秘的なものではありません。自然は神の被造物なのです。

「優しさで包む」。最近の教皇さまの文書の中に「優しさ」という表現が多く見られます。すべての被造物におよぶ神さまの「優しい」まなざしと「優しい」手に気がついた人は、自分の周りにある被造物のすべてに対しても「優しく」接することができます。

「包む」という表現も目新しいです。人間と自然は向き合う関係だと思こんでいるわたしたちにとって、実は神さまが被造物全体を包み込んでいるのだという真実に気づくのは、少し難しいかもしれません。「包む」というキリスト教に馴染みにくい表現をあえて用いることで、祈る人が神さまの無限の愛に気づくようにとうながしています。

「やさしさに包まれたなら」と歌ったのは荒井由実(松任谷由実)でした。この祈りのおかげで「目につるすべてのことはメッセージ」という気持ちなれたら幸せです。